

令和7年度第3回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時:令和8年3月10日(火) 14:00～16:00

2 場所:オーテピア 4階 ホール

3 出席者:

[委員]加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員、常世田委員

[オーテピア高知図書館]杉本高知県立図書館長、小新高知市立市民図書館長 ほか

4 議事次第

(1) 開会

(2) 議事

①オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

[資料1～2]

②次期サービス計画の策定について

[資料3～6]

③その他

(委員)

館長の挨拶に、県立は資料費が若干減ったとあった。あとは、これを止められるかどうかだと思う。1億円というのは切る方も切られる方も結構意識する数字。そこを切られると、元財政課担当の感覚で言うと切れると思ってしまう。今まで1億円を超えたところをぎりぎりキープして、ある意味尊重してきたところが、1億円を切ったことでその抵抗感がなくなってしまうので、ここはちょっと踏ん張っていただきたい。続けて今年も、と言って翌年も切られると後はずるずると続くことになるので、そこだけは少し気をつけていただければ。

それから、林総務大臣の視察の話があったけれど、いくら褒めてもらってもいいと思う。彼らは、国立国会図書館などのサポートを受けて質問したり、ということは日常茶飯事で、林総務大臣はかなり勉強される方なので、いい図書館があることの意味はよくわかっていらっしゃると思う。あまり高望みをするのはいけないかもしれないが、林総務大臣からそういう話もしてもらえたら、もっと効果的だったかなと。でも、林大臣が図書館のことを褒めたということであれば、おべんちゃらが半分入っていても本気が半分入っていると思って、話を聞かせていただいた。

それから、これも先ほど出たけれど、ぱっと見た時にレファレンスの件数はやはり気になった。これをどうするか。ここが減っていくと知の拠点という意味合いは薄れてきてしまう。このあたりについて市町村立図書館とどう上手に組めていくかも含めて、質のよいレファレンスの確保、あるいは全県的なレファレンスニーズの掘り起こしを考えてほしい。これは後で話をさせていただきたい。

それから、たびたび言うけれど、市立の分館・分室はすごいと思う。資料1の参考の区分を見

て、市分館・分室の82万冊と県・市移動図書館の10万冊は外で稼いできた数字と考えると、それが本館とほぼ同じか外の方が勝っているのは、他の都市でなかなか見られる現象ではないと思う。ある意味、高知市内で図書館が充実しているのがこの数字に現れている。ただ資料3ページ目の6分館・15 分室と移動図書館の利用者数と貸出点数を見ると、利用者数に比べて貸出点数の方がすごく多いということは、1つは、お子さんの本や楽しみの本を借りる人、要は、複数借りて帰る人が多いからだろう。それから、そこで調べものや何かをして帰ってしまう人は、貸出点数に全然カウントされないの、そういう人が少ないことが推定される。ということであれば、いつもこの話をするけれど、そこを拠点にして何とか掘り起こして図書館ってこんなに使えるんだ、面白いんだということにつなげていく。オーテピア自身にとっても、ここから先、ニーズを掘り起こす、それから、レファレンスなどでもそういったところの利用者から分館を通じてレファレンスが上がってくるような形態のつながり方ができるようにするにはどうしたらいいかという辺りを、深掘りしてみたいと思わせる数字だった。

(委員)

私もレファレンスは少し心配。Google に Gemini が搭載されることが当たり前になってしまっていて、これは他の図書館でもこういう傾向になっているので、むしろその辺りをきちんと首長や財政当局、県民、市民に説明できるような資料、裏付けのようなものを作る時期に来ているのではないかなと思う。実際に、ネットで簡単なレファレンスはわかるようになっているのが全国的な傾向。そういう資料をきちんと作ることが必要だと思う。

利用状況についてはほぼ横ばいなので、大きな問題ではないと思う。問題は目標値をどう設定するかになるかなと思うので、横ばいでいいのかがどうか、もう1つ問題になる。この目標値を各担当の皆さんも含めて設定しているのかが少し気になっている。これは前回、前々回も話したが、この委員会の委員が各現場の職員の聞き取りをする段階にきているのではないかなと思っていて、生の声を聞きたい。組織が大きくなってくると、こういう目標値はどこかで決まったりする。各担当が当事者意識を持っていないと、何となく決まった目標値で、日々の仕事の中で気にすることもなく、それは何となくそういうものだという気持ちになったりする。だから、各担当が当事者意識を持って、その目標値を達成するために日々工夫をする、努力をすることがきちんとサイクルとして生じているか、その辺りが重要で、目標値は目標値、それはそれ、これはこれみたいなそういう精神のありよう、意識の持ち方が、とても重要になると思っている。

(委員)

2月の図書館協議会に出席した際、目標値の話があった。今、委員が言われたように目標をどうするか、例えば、質は反映されないのかなど。非常に数値的な目標が多いけれど、そこをどうするかは少し考えないといけない。この会議でも何回も議論になっているけれど、調べれば簡単にわかることを聞いているみたいなのは、開館以降大分減ってきて、それが減ったことがマイナスだとは思っていないので、その辺りを含め、2期の目標は2期のものとして、3期の目標をどうするかは、後半に考えていきたいと思っている。

(委員)

私も図書館協議会のときに少し申し上げたが、指摘のあったレファレンスの減少について、理由はある程度推測がつき、AIの活用だと思う。結局、みんな自分でレファレンスができるようになれば、図書館員の必要がない、不必要になってしまうという議論がありはしないか非常に気になるので、広い意味での差異化を図るためにも、どうしてレファレンスが減少しているかをいろいろな視点から分析して次期の計画に生かしていく必要があると思う。

ユーザーの方々の情報リテラシーにあたる能力が上がることは図書館としては望ましいことだと思うが、ユーザーの方とは違う書籍の検索や調べ方ができるのが図書館司書ということ、を、どうやって示していくかという時期に来ていると思う。

チャット型の生成AIなどの力を利用すれば知りたいことがかなりわかってしまうというのが実情。ただし、そのときにきちんとしたデータの評価ができるか。それから、フェイクでないかどうか、重要になってくると思う。レファレンスの数も目標値があると思うが、内容の質の保障と高度なレファレンスとして、かなり専門的なものが提供できることを具体的にどういう形で示していくのか。そのための基礎的な分析と方向性を見つけ出すことが非常に大事だと思っている。

(委員)

関係機関との意見交換会での意見の内容等は一見前向きなようだけれど、そうでもないものも結構あるというのが感想。1つは、「こうしてほしい」、あるいは「こうされたらどうか」というのがあるけれど、そのとき、相手から「自分のところはこういうことをする」というのがどこまで引き出せているか。単に意見を聞くだけであれば前段だけでいいが、意見交換であれば、我々はここまでこういうことを図書館に求めるし、それに関しては我々はここまでは手出しをする覚悟があるので、そこまでやってもらえるのであれば上司と相談ができるなど。単純にこういうことをしてほしいで終わっているのか、それとも、その辺りについて踏み込んだ議論がある程度なされているのか、これを読んでいて、そこが一番気になった。

例えば、資料で置いてほしいものなどの要望について、相手の専門に関する資料については、図書館が調査するのもいいけれど、相手から最低限置いてほしいというリストの提出があってしかるべきで、それをせずに図書館に丸投げでこれ集めておいてねというのは、悪いけれど怠慢。それから、私は100の力で100のことをやるのは嫌いで、30プラス30イコール150が好きなので、図書館はそれを受けて進めようと思ったら、相手の専門分野でやってもらえることはしっかりやってもらった上で我々はこれができるという、お互いが提案をし合うところまでできていたかどうか。資料についてはそうだし、展示についてもそう。例えば、若者に高知へ帰って来てもらうための県内企業の紹介コーナーの設置の話があったけれど、素材は自分たちで作って提供するのでやってほしいのか、図書館でやってねという話なのかによって、図書館の仕事量が変わってくる。不得意分野をやることになればその分だけしんどいということ。イベントもしかり。だから、まずはその辺りがどうなのか、もしお互いが提案し合うところまでやっていないのであれば、これからその辺りについて、これはと思うものをどう進めていくのか。「次期計画に反映」とほとんど全部に書いており、全て反映してこちらが全部引き受けたら1発

でつぶれると思ったので、あえて言わせてもらう。いいことがほとんどで、1つ気になった問題点だと言うことを言っているだけで、全部が悪いと言っているわけではない。そこは勘違いしないでほしい。現場同士で話をするのは非常にいいこと。

もう1つ気になったのは、「今回初めて図書館の機能を知りました」というような意見や、「おいおい、今までどうなっていたんだよ」という意見が中にはあった。少しその辺りが、読んでいて腰が砕けた。どうしたらいいだろうと思う。「こういうのはいいよね」とか、「イベントや何かを長く続けていくために話し合いをしてみたい」など、前向きな話がかかなり多いので、全体的には評価したいと思うが、今言った2点、1つは自分たちはこれをするからというところがどこまで議論できているか、それから、先ほど言った腰が引けているところに対して、どういう形でこれからプッシュしていくのか、あるいは、場合によっては切り捨てるのか。その辺りについて少しコメントをいただければ。

(小新館長)

今回ヒアリングをしたのが、いわゆる代表の方ではなく第一線で活躍している方、現場でよくわかっている方に聞きに行ったというのがまず第一。その中で、どれぐらい図書館の事業を理解されているか、今まで一緒にやった事業はもちろん知っているけれど、それ以外に図書館はこういうことができますといったアピールをしていたかと言われると、図書館として総合的なサービスやメニューまでは言っていなかったので知らなかったという意見が出たのではないかな。今まで一緒にやった部分の印象が強く残っていて、図書館がこんなこともできるというアピールについては、少し抜けている部分があると感じた。初めて知ったというのはその辺りのことだと思うので、これを切り捨てるというよりは、今まで関係を持ってもらっていたので、これをきっかけに広げるのが本来かなと感じている。ものによって提案がありますというのもあったが、どちらかというとなんか図書館にやってほしいというものが非常に多く、いや図書館は場所や資料を提供し、それに対して各団体がやっていただくのが主じゃないかという感想を、職員との協議の場では述べさせていただいた。

人員も限られる中で、全て図書館ができればそれが一番いいけれど、そうではなく、お互いにウィンウィンになる関係を意識していく必要があるとも思っていて、図書館はここまでできますと職員が示した上で、どうですかやりませんかというのが落としどころかと考えている。

(委員)

委員は鳥取県立の館長をされていたので、このぐらいは当たり前という視点で見ているので、なかなか厳しい意見だった。私も、いろいろな都道府県の図書館の職員と話すけれど、関係機関、関係団体等とこれだけ情報交換ができているところはない。

先日も日本図書館研究会という学会のシンポジウムで、鈴木チーフにオーテピアのサービスの発表をしてもらったけれど、大阪府立のベテランの職員が驚いていて、大阪府立も頑張らなければいけないと心底言っていた。少なくともオーテピアのビジネス支援や関係団体との連携事業については、日本でトップクラスだという自負を皆さんに持っていただきたい。

確かに委員がおっしゃるように、今更こんなこと言っているという団体がないではない。し

かし、これを読んで感じたのは、大多数の団体の少なくとも図書館と連携している担当者は、近代的な図書館のあり方をきちんと知っている。つまり、やりとりしている内容がレファレンス、ビジネス支援をきちんと理解しており、そうしないと普通は会話が成り立たない。日本の働き盛りの人たちは、ほとんど図書館に来ていない。だから、普通は図書館は小説を借りるところ、子どもが絵本を借りるところというレベル。ところが、このやりとりを見ると、レファレンスはこの機能があるからここをもう少し頑張ってもらいたいとか、図書館がAIときちんと絡んでいることも正しく理解している。普通、日本人の平均的な働き盛りの人は図書館といえば本ということで、図書館とデジタルが結びついていない人はほとんどいない。けれど、皆さんきちんとそれを理解している。1つは、デジタル系やネットはそれだけでは足りないと言ったけれど、デジタルを使わない人に限って、ネットがあれば図書館は必要ないなどとネット上で言う。本当に調査系の仕事をしている人は、ネットや一部のAIは役に立たないときちんと言っている。図書館が集める情報はそれとは違うことがわかっていて、図書館でプロンプト、AIに対する質問に関するワークショップをやってほしいと、非常に高度な知識と図書館に対する正しい理解のもとに意見を言っている方もいる。これは本当に貴重なことで、日本広しと言えども、鳥取と高知でしか起こらないことだと思う。

それから、専門性を求める意見が多い。レベルの高い情報を提供してほしいという意見も結構あって、期待値が高いと思う。図書館と連携している団体の中に、私たちの団体が連携したいと思っていた別の団体があるという意見もあった。これは要するに、オーテピアがどういう連携をやっているのかを知った上で、そこと自分の団体も連携したいと言っているのだから、非常に理解度が高いしオーテピアを評価している。これは、まさにアメリカの図書館などがやっていることで、団体と団体を引き合わせて、そこに図書館が関与し、新しい試みを生んでいくことを、連携している団体の担当者がきちんと理解しており、これは普通はあり得ない。それから、交流機能として、そこに市民が来てワイワイやっているのを知っている。例えば、異業種の人が交流するという図書館が持っている機能、我々も利用をしたいと言っている。こういうことも、図書館は、個人で行って、静かにしなければいけないところという旧来のイメージからは出てこない話で、きちんと理解している。

それから、組織内教育ではもう足りなくなっている。企業、行政、それ以外でも日本の組織は、これまでは組織内教育でやってきたけれど、できなくなってきたので、自分の組織の構成員の自主的学習を支援してほしいと言っているところもあり、これは欧米型だと思う。皆さんの努力の結果として、図書館に対する正しい知識を関連団体の構成員の方々が持つところまで来ているので、非常に自信を持っていただきたい。

よくあるのは、図書館がこういう聞き取りをやると、自分たちが図書館の仕事を何か手伝われるのではないかと警戒すること。高知も、10年ぐらい前にこういう聞き取りを始めたときは、まさにそういう警戒するような雰囲気があったけれど、今回は、明らかに自分たちは図書館の利用者で、便益を受ける側なんだということをきちんと理解していただいているようで、これは本当に図書館の皆さんのこれまでの働きの成果だと思う。先ほどの話の中にも少しあったけれど、聞き取りそのものがPRになる。アンケート調査もそうだけれど、それをやること自体がPRになり、やりとりする中で他ではそんなこともやっているんですかというように知るこ

とも非常に効果的で、聞き取りをする、関係性を維持することが重要と思っている。

最後に確認したいのは、こういう成果を上げていることを知事や教育長、地元の新聞やテレビの関係者は知っているのかということ。これはぜひアピールする必要があると思っている。

(委員)

両委員の言葉で語り尽くされているけれど、資料3,4,5を見て私はニヤニヤしていた。特に資料5は、このメンバーが基本構想に着手したところから、なぜこの場所に建てるのかという辺りがねらい通りのことになっている。オーテピアだけ来ればいいという話ではなく、セットメニューとして、買い物して楽しい、食事して楽しい、飲み食いして楽しい、それで図書館が楽しい。科学館はもっと楽しいということに、そうなればいいなと思って、いろいろな提案させていただいたけれど、結構上手くいっていると思って見ていた。

もう少し真面目に言うと、ここで出てきた話の1つ、来期につなげるとしたら委員が言われたように図書館がどこまでやるか。それと、委員が言われた、こんなにすごく連携しているところは滅多にないので、これを生かすかどうかという視点がもう少しあってもいいかなと考えている。

それで1つの要望としては、ハブになってほしいというのがある。委員も言われたけれど、私たちの団体が連携したがついてくる〇〇という団体と図書館が連携しているというところを見ている。そして、その団体に自分たちから声がけするのはなかなか障壁が高いけれど、オーテピアがまとめてくれるのだったらすごくうまくいきそうという直感があるのだと思う。

だから、委員が言われたように、アメリカみたいにハブ化して、図書館がいろいろなものをつなげるという方向性が可能性としてはあるのかな。もちろん、人員や予算などが伴うこともあるけれど、このアンケート結果を拝見すると、そういう1つの流れへの期待はあると思う。

もう少しざっくり言うと、プロジェクト化しないといけないかということ。委員や私、他の委員も大学で勤めていたときに、これについて教えてくださいと言ってくる企業の人はいっぱいいる。それが資料4だと思っていて、教えてと言われて私がいつも返すのは、研究費はお考えでしょうかということ。つまり、連携してプロジェクト化しないと、今は答えが出ない。それと少し近いところがあって、オーテピアがプロジェクト化するのかどうか。オーテピアがレファレンスサービスの枠内で、すべての要望に応えるのは難しい。オーテピアで宣伝してください、こうしてくださいというのは、丸投げされてもできないので、どこまで連携プロジェクトとしてやれるのかを、そろそろ考えたほうがいいかと。特に、防災系で高知市からいろいろ要望があったりすると、同じ市の部局なのでプロジェクト化できそうな感じもするし、もちろん県の部局とも連携できそうな感じがする。合築できている訳なので。

ということで、これも思いつきレベルで、法律の裏取りをしたわけではないけれど、サッカーで例えるとレンタル移籍(期限付き移籍)。ある部局の方が半年だけオーテピアに来る、あるいは半年だけ半々で働くといったことも、県や市、あるいは地方独立行政法人などは頑張ればできと思っている。そんな中で一つのプロジェクトを立ち上げて、元の組織に還元していただくこともあるだろうと考えた。

それから委員から組織内教育がもうそろそろ難しくなっているという話がでたときに、私は、

リテラシーについてはオーテピアのテーゼとしてずっと持ってたけれど、新しいリテラシーなのかということ考えた。特に、こうち企業支援センターの「AI活用のノウハウ」などについて個別の団体でなかなか準備できないということであればビジネス支援の枠組みを生かしつつ、新しいリテラシーの1つの形として、オーテピアですするというのも1つの考え方かと思った。

そういった意味で、私みたいに研究費を申請しないと食べていけない人から見ると、何かありがたいネタ集をいただいた感じがする。いわゆる組織論や、先ほどのハブ化、プロジェクト化、新しい形のリテラシーなど、そんな枠組みをつくりながら、少しずつでもやっていけばいいという感じはする。これは全部やるともちろん大変だけれど、3期は5年あるので、順番にやれば一定の成果は上がるという感じもする。もちろん手ぶらでやろうとすると、委員が言われているように、つぶれることになってしまうので、これを機に新たな予算についてもお相談させていただきながら、さらに、内部的な人的資源を増強しながら、前向きに取り組むのも1つの考え方ではないかと。

(委員)

意見交換会で、これだけの意見がよく集まったものだとも私も正直思った。おざなりなものではなく、自分の問題として考えられている意見が非常に多いという点は評価すべきだと思う。

そして、いろいろ指摘があった中でキーとなるのは、オーテピアに丸投げでいいということではありませんよということを理解してもらうこと。本当の意味での交換ということはどう考えるか。

その他に出てきたキーワードとしては、ハブやフィクサーのほか、プロジェクトについては予算を伴う問題が出てくる。だから、全体を覆う形としては、新しいリテラシーについては、特に、AIと絡めたりテラシーで、生成AIとの兼ね合いになると思うけれど、そのあたりの概念を中心に据えて、今後のサービスを考えなくてはいけない。とりわけ、予算問題は難しいかもしれないが、そこを何とかするところがポイントになると思う。今後のことを考える上で非常に重要な指摘が多かった。

(委員)

前回の議論に戻るかもしれないけれど、とりあえず押さえておきたいことを3つ、そのあとに個々のサービスの中で重視してほしいこと、気になることをそれぞれのところで取り上げたい。

1点目。図書館の目的は地域への貢献であることを徹底していただく、再確認していただく。いかに県や市を守るのか、あるいは発展させるのか。それから、県民・市民の幸福をいかに増大させるのか、あるいは状況を守っていくのか。それを行うことによって、図書館は地域全体に対して貢献していく、また、あらゆる分野に対して関与することが可能だということ。そういう特殊な場所であることも踏まえた上で、個別の図書館機能はそれぞれ大事だけれど、大元にある、図書館は地域に貢献するというのを、ここに書くというよりも、それを作っていく過程と実施していく過程の中で、繰り返し再認識し続けてやってほしい。

そのために3つほど挙げておきたいけれど、1つは、大きな方向性をしっかり持つておくこと。

一番大きなのは地域に対する貢献だし、それ以外にも個別に考えていけば柱になる大きなものがあるはず。自分の担当レベルに注意関心が偏ってしまうと、他との連携がうまくいかなくなったり、様々な弊害が出てくる。かつての図書館、行政にはよくあることだけれど、自分の担当の範囲だけやって、頑張っていますという話になってしまうと、それはオーテピア全体としては非常に危ない状況になるので、方向性はしっかり持つておく。今言ったことが2つ目だけれど、横断的に、常に自分の仕事はどこかと関わりがないかということを考えて動いてほしい。その横断的というところが崩れていくと、先ほどの $30+30=150$ ではなくて、どうしても $100=100$ の仕事になっていくし、その100のことをやっていることで自分は一生懸命だということになりかねないし、これをやっていると頑張ってる割には評価が低かったり、相手に対して、こんなに成果が上がっていますと言える事例がなかなかつくれなかったりということが出てくる。だから館内での横断ということも大切にしてほしい。外との連携も大事だけれど、外から拾ってきたネタを展開していくのに、館内での横断的な協力、あるいは要請をどういうふうにしていくのか、お互いにそれがやりやすくなるような環境をどうつくっていくのか。

それから、3つ目はボトムアップも重視しながら、マネジメントをしっかりとやっていただきたい。私の場合は、短期間で何とかしなければならないというのがあって、自分の発想でいろいろなことをやろうとしたけれど、そうは言っても、現場の思いはできるだけ吸い上げて、いかにして楽にやるか、楽しくやるか、効果が上がるようにするかを考えてやってきたつもり。図書館が成熟していく過程の中ではそうしたマネジメントがきちんと成立して、初めてよりよい方向に成熟していくと思うので、ボトムアップを重視しながらのマネジメントを常にやっていただきたいというのが1点目。地域への貢献をどうやっていくかは、私が考える大事な3つの柱のうちの一つ。

それから2点目。高知県でいうと、市町村立図書館は本当に死屍累々だったところに新しいものが出てきて、なかにはこれは面白いぞというところもできつつあるということ言えば、今は市町村立図書館に対して、ある程度リソースを割いていく時期ではないかと思う。

例えば、土佐市だと、私の目から見ると早くでき過ぎてしまって、リソース、本を届けるというレベルではなく、経営相談というレベルも含めた支援はどこまでできただろうか。整備後の状況を見ていると、資料費などを減じられたりして、最初の勢いが少しなくなりつつあるような気がしないでもない。

また、香美市は、開館当初のメンバーがほぼ入れ替わり、県立図書館OBも今年度末で退職すると言っているの、そういう意味でいうと、大きなエネルギーを持ってやってきた人たちがいなくなる時期になっている。

一方で、佐川町は面白い動きをしていて、非常に注目されている。また、須崎市は来年度のオープンに向けて非常に頑張っていて、かつての須崎市を知っている自分からすると、こんなにいいものができるんだ、面積はそれほどでもないが併設されている施設、それから、広い敷地があり、野外でのイベントができるなど、本当に使える便利のいい図書館ができる。ただ、職員の人数が少し少ないなど、問題は幾つも抱えている。この間も、行政職員の方に話をさせていただいたが、今の時点では全然ピンときていない。だけど、図書館と組むとこんなに面白いことができると言って須崎市がやってくれれば、やれるステージは与えられているので、化け

る可能性は結構あると思う。ということで、今のタイミングで高知県内の市町村立図書館がいい方向に動いてくれるのだったら、それぞれ特徴のある図書館が登場し、頑張ってくれて、うちもああいうのを作りたいというところが増えてくれる可能性がある。小さいところはそこまで無理かもしれないが、でもその可能性が一番ある時期ではないかと思う。だから館内のリソースの一定の部分を市町村の方に、先ほど言った運営そのものの相談なども含めて振り分ける。この間、話をしたのは行政の人で、図書館の使い方の説明の中で、いろいろな情報を取ってほしい、その後ろにはオーテピアがついているということを言った。要は、目の前にある図書館だけを見て、資料や情報が手に入らないと思わないでほしいと、かなりしつこく言っている。そうした要望に対して、オーテピアがいかにスムーズに相手の望むものを提供していくかによって、新しい市町村立図書館のイメージは大きく変わってくると思う。ぜひこのタイミングは逃さないでほしい。

それから、最初のところでも触れたが、市の方は分館・分室がこれからどういうふうに、オーテピアのニーズにもつながるような働きかけ、共同作業をするか。例えば、先ほどのレファレンスなどにしても、市町村などから結構面白い内容の依頼がされる。分館・分室から、こういうのをちょっと調べてくださいなど、具体的に中身を指定されたもの、また、こういう本をぜひ届けてほしい、買ってほしいという希望が出てくるようになれば、非常に有機的な、高知県・高知市全体の体系ができ上がっていく、そういう時期だと思う。

3点目は、そのためには人材がここオーテピアに必要。皆さん本当に一生懸命やっていらっしゃると思うけれど、先ほど言ったように、どうしても自分の担当業務に一生懸命になりがちだったりということがある。それから、例えば、行政などの本当にしんどいところでやっている人からすると、図書館はそうでもないよねと見られるけれど、そういった乖離も意識しながら、自分たちはどういう仕事の仕方をすればいいのか、あるいは、自分たちの力と、例えば、行政・議会との組み合わせをどうやったらいいのかを常に考えられるスタッフであってほしい。

次は骨子案について。ボーンデジタルについて挙げていただいております、本当に大事。ボーンデジタルについてはペーパーで残す方法もあるが、いわゆるクラウド的な残し方もあり、その併用の方法をどうするかはコストの問題で、残したときの安全性の問題もある。全部をこちらにしなければいけないという考え方ではなく、これはクラウド、これはペーパーとして残すべきものというところを、ある程度議論しながらやってほしい。

また、行政支援サービスがどれぐらい伸びているか。何をしてほしいというもの、議会と行政からどんなレファレンスが来ているかという一覧表はあるのか。一覧表でもいいし、こういうのが来たという例示でもいいが、できればそういうものを作って外に出してほしい。要は、我々はこういう質問を受けてきちんと答えているということを、特に県・市の上層部に向けてアピールするときに、細かい中身まで書く必要はないけれど、議会や行政課の各担当からこういう質問を受けています、これに対して我々は、一定程度のこういったものを返してますという一覧表。実際にこれはかなり有効で、私が講義をしに行くときも、行政の人たちにそのペーパーを見せている。鳥取県立で2年ぐらい前に無理を言って作ってもらった。「出せませんよそなの」と言いながら何とか出してもらった。

当然、全部匿名にはなるが、それを見ると、他の部局の人はこういうことを聞いてもいるん

だとか、これだったらあれについて調べてもらう、あるいは、連携協力した内容を見て、これだったら自分のところのあの課題にぴったりだということがすぐにイメージできる。だからぜひ、常任委員会などで資料として提出してみしてほしい。そうすると、議員の皆さんが議会で質問する内容について、事前に我々に質問を出してくれたら、議会での質問を今まで以上に良くするための資料を我々は提供できるということが、その一覧表を見ればすぐにわかっていただける気がする。

それから、情報リテラシーはいろいろな段階でやってほしい。例えば、皆さんが講師になるレベルもあるだろうし、専門家や高度な知識を持った方に来ていただいて、そういったことを学びたい行政や企業の人たちと我々が一緒に学ぶような場があってもいいと思う。そこまでいくと図書館が単体で行う必要はない。それだったら情報の担当課、あるいは、企業関係の責任のセクションの方と一緒にこういうのを届けましょうという形でやってほしいと思う。そういう複数の段階をもって進めていただきたい。これは多分どこも困っていることなので、図書館が今の段階で力を入れてほしい。くれぐれも言うておくが、自分たちだけでやる必要はなく、組んでやる。それをやることによって、図書館は本当にデジタル関係のことについても積極的だし、あそこに頼ってみようかと思わせることになると思う。

高知市全域サービスは、先ほどからいろいろ言っていて、もうやっていらっしゃるかもしれないけれど、分館・分室での出張講座や、図書館をもっと自分たちにとって役に立つもの、もっと楽しみ方が多様にあることに、分館・分室の利用者の方に気が付いていただく講座みたいなものが、たびたび開かれるといいなと思いながら資料を読んだ。

それから、県立学校等も同じようなことで、生徒に対してではなく、学校の教職員に対する図書館リテラシーについての講座を、オーテピアでやるというよりも学校単位でやってもらいたい。全部の講座をやる必要はなく、もしかしてもうすでにやってらっしゃるかもしれないけれど、講座をパッケージにして、こういうパッケージがあるので、手を挙げていただければ、うちの方でセットにして行きますよという形で提供していただければと思った。

(委員)

サービス計画を作るのは大変な仕事。担当の方は日常業務を行いながら作らないといけな。また、館長レベルになると、基本方針がコロコロ変わっては困るし、よくよく考えて作ったもののはずだろうと外部から言われるかもしれないので、基本計画や基本方針はあまりいじりたくないという気持ちはわかる。それから、担当からするとサービス計画が非常に進歩的なものになってしまうと自分の仕事を変えていかないといけなくなるから、自分の担当の仕事が劇的に変わるのは困る、徐々に変わってほしいという思惑があって、どこの図書館でも最初の基本計画のときはかなり力を入れて作るけれど、2期、3期になるとなかなか手が入りづらくなる。高知の場合は、最初の基本計画がかなりよくできていたので、それはなるべくいじりたくないという気持ちはあると思う。

いろいろ細かいところは、委員がおっしゃったので私は1つ。

基本方針5番の進化型図書館について。お年を召した方は覚えていると思うけれど、40～50年前にアルビン・トフラーという天才的な人が書いた「第三の波」。その中で、さすが天才はす

すごいなと思ったのは、進歩そのものは問題ではなく、その変化のスピードが問題だと言っていること。まさに今それが起きていて、生成AIは2022年11月に登場して、またたく間にものすごい進化を遂げている。

私は多少コンピューターやっていた。1950年に朝鮮戦争が起こってコンピューターは進歩した。1つのことが変わるには10～20年かかってきた。私が1980年当初に浦安に就職した頃、公共図書館にコンピューターが入り始めて、その頃から30～40年の間、コンピューター関係でデジタルの変革をしようとする10年単位で時間がかかっていた。ところが、今のスピードは半年や1年で、こうだったらいいよねというのが実現されてきてしまっている。

今はまだAIはネットの中にしかなくて、ロボットはロボットで単独の制御系として存在している。ところが皆さんご存じのフィジカルAIが今、見通しがついてきて、ロボットとAIを結びつけることが起こりつつある。別に物理的なロボットの中にAIは必要ない。通信でOKなので、ものすごいバックボーンを持ったAIが、例えば、人型ロボットを通じて何か作業を行うという状況がもう目の前に来ている。

図書館の歴史を見ると、1980年代の前半にコンピューターが図書館に導入され始めたときに、図書館界はこぞって、非人間的な図書館になるとかで大反対した。ところが蓋を開けてみるとどうなったか。きちんとした図書館は、コンピューターが入ったらそれを生かしてサービスをどんどん進化させた。駄目な図書館は、コンピューターを入れようが入れまいが駄目な図書館だった。コンピューターが日本の公共図書館に入ることによって、その後の大量貸出を何とかしのぐことができた。

今は当たり前に使っているけれど、そのときに日野市や浦安市などは、市役所よりも先に図書館にコンピューターが入っている。富士通や日電(NEC)はまだ参入していなかったが、中小メーカーと一緒に汗水垂らしてシステムを作った私たちの先輩がいたからこそ、その後の大量貸出に耐えることができた。改定したサービス計画はおそらく5年間使う。その5年間で、進歩型図書館の部分はものすごい変化が起こると思うが、私は図書館の本質は変わらないと思う。

不易流行という言葉があるけれど、本質は変わらない。委員がおっしゃったように、情報提供して、県民・市民の生活、いわゆる地域の発展に寄与するということは全く変わらないけれど、その具体的な手法は劇的に変わっていく可能性がある。今回のたたき台を見ると、至所に、「非来館型サービス」が出てくる。どこに住んでいても利用できる全域サービスや、図書館利用に障害のある方については図書館に来なくてもサービスが受けられるから非来館型、それから、ICTやAIの進歩で非来館での各種手続きが簡単になるなど、個別に考えて、違う側面で非来館型と別々に言っているけれど、大きい視点で俯瞰してみると、AIやデジタルを使った非来館型の図書館のあり方という新しい取組をしなければいけないところが見えてくる。各担当の方はその担当の仕事の切り口でしか見ていないけれど、実はもっと大きなレベルで、問題を同時に解決できるようなデジタル、AIの利用の仕方がある。例えば、メタバースの中に、リアルと同じような図書館を作り、そこに入れば、リアルと同じような図書館をデジタルの世界で利用できるようにすることは、お金をかければ実現できてしまう。

それから、例えば、レファレンスは各図書館で別々にやっているが、技術的には可能なので、アメリカなどでは当たり前リモートのレファレンスを集中的にやっている。そうすると、各市

町村の有力な図書館員とネットワークを結んで交代でレファレンスをやるといったこともできる。資料はオーテピアが一番多いので、紙ベースの資料を使ってレファレンスをやらざるを得ない現状を見ると、市町村の優秀な図書館員がオーテピアに来て交代で全県のレファレンスをするなど、デジタルを導入するだけにとどまらず、組織も変わっていかなければいけないという大きな視点で次のサービス計画について考えなければいけないという気がする。

基本計画では高邁なことを言っているが、個別のところになると物足りなくなるということとはよくあるけれど、今回の骨子案を見ると、この進化図書館については、ものすごく尻すぼみになっている。単に、ポーンデジタルをどうするか、県内のデジタルアーカイブをどうするか、電子書籍をもう少し使いましょうなど、そういうのは従来型から一歩も出ていないのではないかな。もっと大きな視点でのデジタルAIの活用を考えなければいけない。

私がちょっとカチンときたのは、この「取組の方向性」の中で進化型図書館について、「AIの活用」の検討と書いているところで。5年間「検討」を続けるんですか。そうではなく、「導入」、「積極的導入」ですよ。ただそのときに重要なのは、委員がおっしゃったように、基本的な図書館のあり方は、強調し、し過ぎることはないので、あくまでも従来型の図書館の重要な役割を果たすために手法を変える、その視点をサービス計画の中ではっきりうたわなければいけないと思う。

（委員）

委員からも提案があったが、そろそろ市民図書館の分館とは Zoom レファレンスを始めてもいいと思っている。R5年に著作権法が改正されて、レファレンスサービス程度の話は公衆送信で行っても罪に問われないという観点からすると、来年度から始めても別に遅くはない。特に、レファレンスの数が大事ということもあるので、2期の終わりに向けて、市民図書館の分館に、レファレンスサービスの端末を置くぐらいの気力があるとレファレンスが伸びるかと思った。

その上で、図書館協議会でも話したけれど、委員の話からすると、1回は司書の皆さんとAIのどっちがいいんだろうというバトルがあると思う。結論は見えていて、私は乗り越えられるが、結構大変だと思う。

ChatGPTの状況については、昨年末に5.2ができて、ぼうっとしていたら今年に入って5.3になっていて、「こんにちは5.3です」と言われた。「どこが良くなったの」と聞いたところ、何十行もスクロールするぐらい自慢話をする。「はいはい、わかりました、よろしくね」と言ったところ、先日、5.4になっていて、「お前いつの間に進化したんだ」と言ったら、「私は常に進歩しています」と言ってまた自慢話を何十行もされた。ちょっと恐ろしいのは、私は大分批判もしているけれど、5.2以前は口から出任せ的に資料を探してきた。5.4では、問題を解決するためにはこの情報が必要で、この情報はどこにあるかと思ってネットを探したら、こういう情報がありましたというところまで到達している。その情報がどれだけ有効か、正しいかまでは残念ながら、AIではなかなか合理的には判断できない。

しかし、全体の枠組みとしては非常に参考になる。この情報があればこれができるというのは、専門的にはチェーンオブソート(CoT)と言う。最近では考えの流れも教えてくれるので、この問題はこれとそれという情報があれば解けるという場合に、その情報があつてこそ、この情報

が使えるというのは割と今イチで、なかなかそのとおりいかないが、でも枠組みはだんだんできてきた。ということになると、AIを使いながらのレファレンスもそろそろ出てくるかも思っている。

いずれにしても、委員がおっしゃるようにAIの活用も積極的に導入せざるを得ない。そうしないとまさに、Google と Gemini で何でもわかるからといった世界にどんどん取り込まれてしまう。これが、進化型という場合の非常に難しいところ。

一方、このサービス計画推進委員会では話が大きくなるけれど、先日の図書館協議会で委員から、安らぎのある図書館は変わってほしくないという意見や、読み聞かせは続けてやってほしい、子どもがおもちゃを組み立てたりするようなことがあっていい、ぼーっと小説が読みたいといった要望も出ていたし、デジタルデトックスもできたら嬉しいみたいなことまでおっしゃっていた。

つまり、業務でも日常でもスマホから離れられないけれど、図書館にいるときぐらいは本を片手に、そこらに座って本に没入したいといった要望もある。だから、図書館は変わっていく必要がある一方で、一定数の県民・市民の皆さんは、従来型の古きよき図書館があったらいいと思っており、そういう要望にも応えなければいけない。

資料4の意見集約の中にもあったが、基本方針の3の「セーフティネットの役割を果たす図書館」という観点からは、図書館に来たら何とかなるという余地も、ずっと維持していく必要がある。基本理念や基本方針はなかなか変えづらいという話もあったけれど、そういった意味では、例えば、3番、4番などを残して、そういった状況にも応えつつ、従来型ののんびりしたところがあってもいいという意見にも、応えていかなければいけないという意味で、課題はたくさんある。

あと一言言うとしたら、AIの活用と導入をどうするのか、意見集約の中に、司書がAIの活用について勉強して身につけたノウハウを還元するワークショップをやってくださいといった意見があったけれど、これは非常に積極的な図書館の役割になっていくと思う。

特に、司書の皆さんがAIを活用するノウハウは、一般の方よりもずっと深いところが出てくるだろうと。そういった意味で、なかなか奥深いところがあるので、ぜひ、積極的な導入に向けて検討を進めていただきたい。

それから最後に、スマートシュリンクについて、「取組の方向性」のどの辺りに出てくるのか少し見えにくいと思う。

(委員)

考え方としては、AIの活用を前提にした仕事ということは避けられない。その上で委員が指摘されたように、特に生成AIになると思うけれど、5年間の進化をどうとらえるのか。これについては、サービス計画のどこかに現時点での考えを明記した方が全体の内容を書きやすいと思う。

それから、人型ロボットの話も出てきた。例えば、ここの受付を人型ロボットが対応することが現実的に5年以内にあり得るかどうかとも考えると、実用化は可能。だからそういう方向性を実際にとるかどうかは別として、想定しておく必要がある時期に差しかかっている。

一方、意見集約の中にもあったと思うが、旧来型というか、いわゆる紙のにおいのする図書館を望む方が多いし、特に子どもに対する読み聞かせなどは、例えば、AIの読み上げ機能でいいののかも考えなければいけない。

ところが、読み上げ機能については、バリアフリー読書などの関係で言えば、非常に有効な手段であるのも事実なので、そのテクノロジーの進化をどうとらえるか、その図書館だけではなくて、人間の生き方に非常に関わる場所。先ほど言ったように、さまざまな抽象度のレベルで考えておく必要があり、次期計画はそうしたものにならざるを得ないと思う。

それから、もう1つ私が気になっているのは、自分の年齢も考えると、そういう動きに取り残される人がどうしても出てきやしないかということ。例えば、スマートシュリンクの話題も出たけれど、実際に新しい図書館があちらこちらの市町村にできている一方で、そもそも人がいない地域も随分と増えており、そういうところをどうするのか。いわゆる情報弱者を作らない、情報に取り残された人を生まないサービスをどうやって展開するのかを考えたとき、スマートシュリンクによって、いろいろな面で制限がかかると考えざるを得ないが、なおそれを乗り越えてサービスを末端まで届けていく必要があると思う。裏を返せば、そのためには技術力、AIの活用を考えなければいけない理由にたどりつくと思う。それから、いろいろな人が集まる場所としての図書館という、建物の居場所としての役割や、高知の場合は避難場所という側面もある。そういう必ずしもAI、電子的な技術の進歩、進化とは直接関係ないかもしれないが、気配りをしなければいけない難しい問題があると思うので、委員がおっしゃったように、そもそもの基本は何かをきちんと押さえたうえで、時代の要請であるAIの活用を前提として、業務の効率化を図っていくしかないと思う。効率化を図らないとスマートシュリンクの中で立ち行かなくなってしまう可能性があり、これには予算の関係が必ず問題になると思う。そういう非常に難しい条件の中でのサービス計画の作成になるが、頑張っていたきたい。

(委員)

新しい技術が出てきたときは、古い技術と新しい技術を対抗させるように捉えがち。例えば、新しい技術が入ってくると、先ほど話したように非人間的になるのではないかなど。だけど、新幹線が出てきたからといって、自転車がなくなったかと言うとなくなる。だから、新幹線と自転車の対抗的な関係ということではないが、私たちは新しい技術と古い技術を対抗させて、新しい技術は馴染みがないが、古い技術はいいところがあるじゃないか、だからいいところがなくなってしまうのではないかといった議論をすぐに始めてしまう。

図書館にコンピューターを入れたときの話をしたが、だめな図書館は所詮だめで、コンピューターを入れて非人間的になったかと言うと、もともと非人間的。だから、そういう間違いが起こりがち。例えば、フィジカルAIについて、ロボットとAIが一緒になって、人型ロボットに書架整理をさせる。非人間的な単純な書架整理、つまり、朝、短時間で本を綺麗にそろえましょうなどというのは非人間的な機械的な作業で、書架整理はそれだけでいいのかと言えばそうではない。

ベテランの司書がする書架整理はそうではなくて、朝の書架整理をやるときにいつも書架の同じ場所にある本は使われておらず、なぜこの本は使われてないのかと考える。あるいは、こ

の場所にこの本は似つかわしくないと考える。例えば、名前の付け方は2類だけれど、599の育児のところに行く人が多いと思う。2類にあるなんて、連想する市民はいないので、気の利いた図書館は、名前の付け方は2類だけれど、それを599の育児のところに置く。朝の書架整理をやりながら、人間が考える高度な書架整理とはそういうこと。だから、非人間的な機械的な書架整理は、フィジカルAIのロボットがやるようになって、司書は人間でないと考えられない書架整理をする。決して技術的に対抗的な関係ではないということを、皆さんに考えていただきたい。

例えば、人型ロボット1台を200万円で売るという話が今、一番進んでいるのは中国で、もっと安くなるかもしれない。そうなると、アルバイトの方の1年間分の人件費と同じくらい。そのロボットは電気を消した真っ暗な図書館の中で、一晩かけて書架整理をやり、朝になったら綺麗になっているということがもう目の前に来ている。図書館には非人間的な単純作業がたくさんある。そういう作業から専門職が解放されて、より専門的な仕事に向かうことができる。今日の前半の話にあった、関係団体との意見交換会で要望のあったサービスを実現するためには、単純作業を人間がしないようにしていくという道理になる。

それから、この骨子案で出てきた非来館型サービスについて、アメリカの図書館はこれをずっとやってきたから新型コロナのパンデミックのときに、多様なサービスを維持できた。ところが、日本の図書館はただ閉めただけで何にもできなくなってしまい、手も足も出せなくなってしまう。だけど、パンデミックが去った後、日本の図書館はそのことについての反省をしているかというと、ほとんど何の反省もしてない。またパンデミックが来たらただ閉めるだけで、手も足も出さないということになるのではないか。だから、それをデジタルで乗り越えていくことを今検討しないと、またパンデミックが起こったときに対応できない。そういうデジタルの視点で、サービス計画について考える必要があると思う。

(委員)

確かに今、フィジカルAIが非常に流行っているが、向こう5年間で言えば図書館には入って来ないと思っている。私が期待するロボットは、もっと非人間的なところに投入されるもの。例えば、放射線がある場所で部品を取り替えるなど、人間がやれば死んでしまうようなところに出てくるのが、今の使い方の想定なので、普及にはもう少し時間がかかると考えている。

第3期の5年目には、人型ロボットがそこらじゅうを歩いている可能性はゼロではないけれど、逆に、汎用で使うのは極めて難しい。そういう意味からすると、考えながらやるのではない書架整理といった単純な作業は、人間の勝利の見込みはあると思うし、難しい作業はマシンが壊れそう。2類の棚から本を持ってきてここに置くといった作業をすると、マシン本体が壊れるのではないかと考えている。だから、私は高級機が普及しないことを期待している。

(委員)

今思ったのは、とにかく我々には勉強が必要だということで、それは楽しいことだと考えて仕事を進めるべきだと感じた次第。

事務局はたくさんの意見をいただいたので、その意見を十分に踏まえて図書館の運営を進

めていくようにお願いしたい。

それでは最後の議事 4 について、事務局の方から何かあればお願いします。

【事務局】

その他について、報告はありません。